

校友時報の歴史と草創期の思い出

能代高校新聞部OB会長

続 隆

『校友時報』の縮刷保存版が創立七十周年記念事業の一環として刊行の運びとなったことは、関係者一同の長年の夢であったので、本心に嬉しく思います。

昭和二十四年一月、津島洋史氏（新制二期）が文芸部内に新聞班という形で芽を作り、一期下の私は同氏に誘われて入り、その班員は二人だけでした。

昭和二十四年四月二十日に第一号を発行、第六号まではガリ版でした。当時文芸部と新聞部の顧問は鎌田宏先生で、両部を掛け持ちする複数の生徒がおりました。

新聞部として独立を認められたのは昭和二十四年六月でした。昭和二十四年十月十二日の第七号から活版印刷となります。

『校友時報』の命名は鎌田先生と小田嶋朗、津島洋史、山方正登（いずれも新制二期）氏の合議によるものです。

題字は第七号より津島氏の木版画に、津島氏の父（当時、能代税務署長）の筆によります。第二十七号より題字と地紋が現在の型に変わりましたが、これは谷内昭夫氏（四期）の筆によるもので、現在まで続いております。おもしろいことは、その題字の版が部室内で時には見つからなくて、号によっては題字が活字印刷となっている号も五指以上にのぼります。

印刷所は昭和二十四年・二十五年は能代印刷所。二十六年から二十八年前半は秋田活版印刷株式会社。二十八年後半は秋津活版印刷所。秋田で印刷した三ヶ年間は放課後汽車で秋田市に行き、校正をして終列車で能代に帰るといふ交通不便な時、当時の部員にとっては思い出ひとしおの部員生活でした。その三ヶ年の間、臨時に大勝堂印刷所や小沢印刷所に依頼したこともありましたが、

二十九年から現在まで大勝堂印刷株式会社と続いています。

内容的には昭和三十年代前半まで、「PTA会報」的な学校と家庭を結ぶ機関紙の役目も担っていて、単なる生徒間の情報紙に終わることなく、学校全体の情報提供の重要な役割を果たしていることを示していて、実に興味深いものがあります。

草創期の活動状況は、月二回の発行予定も部員不足と記事収集の未熟さに、時には月一回となり、それが販売力に多分に影響して毎号の販売部数の統計をとってみると、ある時は急に上昇したり、また反対に下降したりして、そのグラフは一定ではありませんでした。わずかな年額五千元（二十四年度）の予算で、一回の発行費は約四千元、業務部員には頭痛の種であり、とくに広告係はその点で一番辛い思いをしました。

新聞は販売制でタブロイド二頁版は五円、四頁版は十円。部員が各教室に入り込んで売っていたのです。生徒全員が買う筈もなく、新聞の出来が良くまた運が幸いすれば良く売れるし、印刷部数の見きわめの苦労もありました。販売料と広告料でまかなうので、普通の新聞社と全く同じ経営でした。文句を言われて買ってもらえない号もあったし、評判が良くて売れ切れという号もありました。

そしてその活動状況は、A号の集金中、B号を校正しており、C号の原稿を書き、D号の企画を練るという、目の回るような忙しさでした。

部数は平均して二百五十部位の発行でした。二十五年度の予算は二万一千円、部員も二十名を越え、部内の機構も改新されて新聞部の活動も軌道にのりました。二十六年度は新制中学校で学校新聞作成経験済みの一年生（六期）の入部をみ、発行部数も五百五十部と増えました。

各種の高校新聞コンクール入賞の常連校となり、『校友時報』は本県高校新聞のトップ的存在となっていたのです。

しかし各期部員念願の全員購読の夢はなかなか実現せず、『良い新聞』『読まれる新聞』への質の向上に努めた部員諸兄姉の努

力・苦勞が報いられたのは、昭和三十一年、生徒総会で全員購読制が許可されたときでした。予算はこの年、五万二千二百円でした。現在の紙面構成は昭和三十年代後半に、ほぼ出来あがっています。四十年四月には第百号記念号を発行。四十一年十二月の第百八号と翌四十二年七月の百十号にはブランクセット版（日刊紙大）を発行し、新聞作りに飽くなき挑戦をしています。

新聞部員の活躍は、校内では生徒会の運営をリードし、対外的には常に先駆的で、中核としての役目を果たし、昭和二十九年に全県高校新聞連盟に県北地区では一番早く加盟。翌三十年には県北高新連を結成し、以後県北のリーダーとして広く活躍してきました。勿論能代山本地区では草創期より中心的存在でした。

部員は情熱的で積極的な人が多く、過去・現在にわたって、朝日・毎日・産経などの中央紙、魁・北羽などの地方紙、そして各テレビ局で活躍した、また活躍している先輩も大勢います。官庁や会社、事業所でもリーダー的存在として活躍しています。

このたびの『校友時報縮刷版』完成のために、その欠号探しは「縮刷版第二集」を発行した昭和五十五年より新聞部OB会員の手によりスタートしています。

平成五年よりは同窓会報『松陵』を通して再三全国の同窓会員に呼びかけてきました。しかし第六号までガリ版印刷であったこと、昭和三十年年度まで自由販売制であったことが原因として、十七号の欠号を生じております。この保存版刊行を機会として、欠けている号が一号でも多く発見されることを願っております。

ここ数年間の欠号探しには、鈴木良夫（一期）大塚哲郎（二期）佐藤満（八期）の三氏に特にご尽力をいただき感謝しております。

最後に、今日までの正副顧問の十九人の先生方、約四百名のOB・OG会員に対しまして、『校友時報』を愛し、伝統を築きあげてきた苦勞に最大の敬意を表わし、母校の発展と『校友時報』の一層の充実を願って筆を擱きます。